

7月29日(月)11時発行 | 金曜・第22巻第1号(毎月11日11時発行) | 特別付録「江戸時代浮世絵の謎」

春燈

2017 January

1月号



主宰の句

安立公彦

秩父往還銀杏黄葉の張りや佳し

(秩父四句)

己が身を捧げ秋日の武甲山

あらはなる山肌に聴く秋の声

石仏の笑みつつましき小春かな

夕空は明日の和みに十一月



成瀬櫻桃子の句

春の鴟孔明馬謖を斬りにけり

『成瀬櫻桃子俳句選集』平成二十二年

三国志に出てくる諸葛孔明の泣いて馬謖を斬る。である。「有能で惜しむべき者なれど、この場に於ては猶の事、断じて斬らねばならぬ」と斬罪に処した。

自分ならどうしたであろうと考える櫻桃子。〈近松忌情にもろきが弱みなる〉と吐露している。櫻桃子の句は幅が広い。中でも人間の悲哀を敏感に汲み取った句が多く見られる。心底人が好きだったのだ。

三上程子

成瀬櫻桃子の句

雨の日は雨の明るさ柿若葉

『素心』 昭和四十八年

さりげなく柿若葉の美しさを詠まれています。まことに柿若葉は人で言えば、青春を思わせる雰囲気を持っています。たとえ雨の日でもその光は失せることなく雨も若葉も共に、格別の輝きを放ちます。

人生は必ずしも順風満帆とはいかぬもの、それぞれの時に応じ、自分の置かれた所で輝きなさい、とのお心がこめられていると感じます。

篠原幸子

燈下集



○ 井上春子

空高し命あるものみな光り
秋の蝶しばらくついて来てをりし
草の絮明日を目指して飛びゆけり
秋うらやさしき人に囲まれて
ある朝の山の濃紺秋ふかむ

○ 中野あぐり

除夜の径さき行く誰も振向かず
海からの日の出のつぼりお元日
初夢や亡き父母がゐて妹ゐて
初売や手締め混じる女声
冬帽子虹には古き彩の無し

○ 諸戸せつ子

帆立の殻山積みにして十一月
津軽海峡に追憶うかぶ冬落暈
文化の日父母は明治の生れなる
日展や未来を案ずるは愚か
老ゆるてふ初体験多々蕪汁

○ 三上程子

主なき書齋も障子貼り替へて
恥ぢらひの色にはじまる蔦紅葉
行く秋の石もて石を打ちにけり
火恋し無駄に言葉をつなぎゐて
かくれんぼの鬼のまま秋了はりけり

○ 大嶋 洋子

山茶花の風の夕べや花散らす

大根煮てふたり暮しの日を恋ふる

境内に人かげ見えず冬夕焼

冬鳥の言葉こぼすや大櫓

十月果つ鯉跳ぬる音背に聞く

○ 綱 徳 女

落人の棲みつぐ里や大豆干す

「崖崩れ注意」の札や穴惑

名の木散る女武将の墓一基

兄の忌を義姉と修すや菊日和

手捻りの猪口をめづるや新走

○ 中村嵐楓子

橋ふたつ越えて帰るや十三夜

目礼のさりげなかりし萩のまへ

音立ててどんぶり置くや木の葉髪

天高しぶつきらぼうなプロポーズ

残る虫間遠に次ぎし間遠かな

○ 鷹崎由未子

秋の日に裳を凝らしぬ武甲山

雁渡る旅寝の夢はセピア色

己が持つ美しき斑しらず秋の鯉

暮れのこる茶の花の白濃きところ

誰ぞ訪へ夜寒の門は鎖さずおく

○ 小張 昭 一

団菊祭成田屋音羽屋菊日和

藤の実に夕風つのる太鼓橋

恵比須切れマンション増ゆる問屋街

これ切りかも知れぬ夜寒の別れかな

栈橋を巨船去りゆく初時雨

○ 鈴木 鳳 来

敗荷や水面を叩く通り雨

霧深し子の権現の小草鞋

風呂敷に母の包みし次郎柿

残菊に無情の雨となりにけり

この湖を時と決めて浮寝鳥

○ 松本峰春

落栗を踏まねば行けぬところに墓

秋天といへど余白に雲を置く

祭獅子の尾もて興ずは出を待つ子(姫路・灘露舞)

魯田に売値つきしを知らぬ雀

神留守の神棚に打つ釘一本

○ 木村傘休

音沙汰の久しく聞かず秋袷

野阜の風をそめたる野菊かな

手廂に武甲見上ぐる暮の秋

山肌のありあり見ゆる冬隣

御手植のことに櫛の黄葉かな

○ 加藤良子

補聴器の電池入れ替へみみず鳴く

急ぐなど言はれ躓く小春かな

淡々と白寿の人や菊日和

歳なりにあるがままにと菊日和

菊月夜どこか遠くに下駄の音

○ 鈴木静恵

紅葉晴みかへり茶屋のお薄かな

焰立つ櫛の紅葉やお七の碑

書に挿む「愛染かつら」の紅葉かな

戸隠の鬼女も出て見よ十三夜

行く秋を赤城・榛名に惜しみけり

○ 鈴木直充

眼を病んで秋の七草口の端に

眼病みとよ色なき風を掴みけり

胡桃割る眼病みに奇蹟起こらんか

縁側はねむたきところ柿たわわ

魯田に夕べの色のすずめかな

○ 高橋和女

戦後長し生かされ仰ぐ良夜かな

秋麗の風や遠出の車椅子

湖北秋いくさを語る焦げ仏

聞きながす技を覚えし冬の鴝

衣かつぎ話途中で忘れけり

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

行く雲の飛天の舞や小春風

丈高く揺れてコスモス終はる頃

雨の日は酔ひの回らぬ酔芙蓉

ものなべて一会の思ひ鳥渡る

夕映の柿遠山の濃紫

○ 坂入妙香

爽やかな空仰ぎ見る夫遠し

娘との会話の尽きぬ障子貼

災害の訃報携へ雁渡る

沈黙や夜露に足の濡るるまで

煮詰まつて鍋ことごとと夜長かな

○ 上野進

霧立ちて闇やはらかくなりけり

夜学の灯消して一戸が闇に消ゆ

戦国の世は散る美学菊人形

干草を焼いて秋天騒がせる

ストーブを先づ眠らせて書齋閉づ

○ 河崎國代

薄紙のおほふ記憶や月白し

亡き父母と語る故郷菊日和

天高し馬をよそ見に長患ひ

菊枕一夜の夢を引寄する

花八手呆けてよりの自己主張

○ 佐藤博重

藪虱つけて兜太の里に入る

石仏の頬の剥落冬となり

欄干に立てば広がる秋の雲

高々と組まれし足場鳥渡る

爽やかに一隅照らす句集かな

春燈の句

安立 公彦選



亀棲むとふ弁天池や水澄める
雑魚を煮る酒一勺や初しぐれ

埼玉 茂木 なつ

さざ波千里秋夕焼が追ひかくる

十三夜手打の蕎麦の届きけり

今生のいのちの果てを月に問ふ

大棧橋きらめき返す小春風

異人二人散歩ついでに毛皮屋へ

生れ元町釣瓶落しの別れかな

小さき手の大きな手締め西の市

農夫婦昼餉の畦や草紅葉

日の匂風のにほひも小春かな

風のあと違ふ彩なす紅葉掃く

花蕎麦のさ揺れ誘ふ旅情かな

心耳に聴く戸隠古道や秋の声

崖なせる戸隠山や裾紅葉

山の端に耀ふ入日赤林檎
秋の海砂浜、広くなりけり
愛らしき栗鼠の仕草や木の実降る

東京 佐藤まさ子

芋掘にあがる歓声農学校

秋日濃し名工展の美術館

手焙りに運命線を語り征く

晩秋の入日昇華の別れかな

牛好む草の枯れゆく風の音

刈田跡肅々たりし月夜かな

原節子偲ぶ茶の花こぼれおて

一葉忌手押しポンプの漉袋

一葉忌母在りし日の「主婦の友」

浮寝鳥白し夕づく橋ひとつ

柿たわわ秩父札所を満願す

秋草の秘むるいくとせ城のあと

福島 物江 康平

千葉 鶴岡 紀代

兵庫 向井 芳子

神奈川 犬嶋アル子

余言

安立公彦

さて夜長「みみずのたはごと」聴くとせう 片桐てい女

「みみずのたはごと」、久しぶりに眼にする書名だ。蘆花徳富健次郎が、現在の芦花恒春園で過ごした六年間の記録であることは周知のこと。東京に来て最初に訪ねたのが恒春園だった。今は樹木も鬱蒼としているだろう。この句を見て、書架の奥から岩波文庫版上下を手にした。上下二冊で五八〇頁ある。数葉の写真が歴史を示す。中では、「村の一年」が、当時の月々の風物をよく語っている。

この句、「さて夜長」と語りかけるような上五が、読み手の印象を和ませる。中七の「聴くとせう」もこの作者ならではの表現。「蚯蚓鳴く」は秋の季語。書名と季語の双方が生きている。何よりも一句を支える活力が若々しい。同時発表の、〈炬火旺ん同情なんて傲慢よ〉もみごとだ。

古墳への径先達の赤とんぼ

柴崎 富子

この句を見ると、千葉県北部にある房総風土記の丘を思い出す。最近訪れていないがいい風景の地だ。古墳は私たちのほのかな先祖が造り上げた古代の墳墓である。作者はいま、その古墳を指して歩いている。ふと気が付くと、「赤とんぼ」が一つ行く先をとんでいる。古墳の周辺は一面の野原。その赤とんぼは作者の案内役かのように、歩む先さきに小さい翅をひらひらさせる。赤とんぼにより、古墳の姿が美しい風景となつて浮かぶ句だ。

一番札所秋寂ぶ音のお賽銭

松橋 利雄

「秩父百番観音霊場秩父札所第一番四萬部寺」が正式名称。西武秩父駅から、直線距離で約五五〇〇メートル。毎年八月には大施食会が催される。秋の季語にある「施餓鬼」である。この寺の歴史は古い。境内には水子地藏の像が何段にも並んでいる。大きくはないが風格のある寺だ。私たちが着いた時、幾組かの参詣者がいた。静かな境内の空気、その中で賽銭箱に投げ入れる音がかすかに聞こえてくる。まさに「秋寂ぶ音」だ。さらに「お賽銭」がいい。「一番札所」と微妙に釣り合っている。秩父札所を詠んだ作品の中では、この地にふさわしい句と言えよう。

除夜の径さき行く誰も振向かず

中野あぐり

早いものである。今年も除夜詣の句が出句された。考えてみると十一月も下旬に入ったのだ。「さき行く誰も振向かず」は、除夜詣の景をよく言い止めている。折から遠く除夜の鐘が聞こえてくる。こういう時、人はどのような思いを抱くか。過ぎ去った一年のこと、来る年への思い。声も出さず、わが行く寺社への道を、ただひたすら歩くのみだ。己という我が身の本質に還って歩くのだ。

己が持つ美しき斑しらず秋の鯉

鷹崎由未子

緋鯉は夏の季語。この句の「秋の鯉」も緋鯉の一種と考えられよう。しかし作者は敢えて秋の鯉として一句を為している。そこにこの句の良さがあるのだ。「己が持つ美しき斑しらず」には、天命とも言える寂寥の思いが漂う。秋の目をあびて、その美しい斑の彩りは、眺める人びとの視線を集める。「秋の鯉」は動かない。

同時発表の、〈誰ぞ訪へ夜寒の門は鎖さずおく〉の句には、泰然自若の気が溢れている。「徳は孤ならず、必ず隣あり」と論語も論ず。みごとな句だ。

これ切りかも知れぬ夜寒の別れかな

小張 昭一

故旧の人との愉しかった時も過ぎ、再会を約しての別れ際に心をよぎる思いである。「これ切りかも知れぬ」は、

心の底からの叫びである。或る程度齢を重ねると、避けられない思いだ。「夜寒の別れ」は自身に言い聞かせる言葉であり、良く一句の本質に適った表現となっている。

露けしや慈母観音は夢の母

岩永はるみ

秩父札所第四番金昌寺での作品。本堂に沿う回廊の一隅に「子育て観音」像がある。豊かな慈しみを湛えた「慈母観音」は、参詣の人みな足を止める。

作者はその慈母観音に、母の姿を重ねる。それはまた詣でる女性全ての思いだろう。「夢の母」に、作者の思う母の姿が、観音像と一体となつて浮かぶのである。

すれ違ふ石鹸の香や十三夜

白神知恵子

「十三夜」ほど古来から文芸や舞台に登上する月はなかった。十五夜には信仰が先立つと謂われる。〈遠ざかりゆく下駄の音十三夜万太郎〉、明らかに劇中の一景である。

掲出句。十三夜の新しい表現の作品だ。「すれ違ふ石鹸の香」が何とも言えず心地良い。夜は若干の肌寒さを感じるが、十三夜の月明りに、すれ違ふ女性から匂う石鹸の香りは、得も言われぬ健康的な美しさを感じさせる。風呂上がりの、着物の帯をきちんと締めた女性だろう、というようなことまで連想させる。いい句だ。